

監査委員会のための内部監査評価ツール

内部監査人協会（IIA）

訳者：堺 咲 子

内部監査人協会（IIA）専門職資格審議会 委員
インフィニティコンサルティング 代表
CIA, CCSA, CFSA, CRMA, CPA (USA)

第1節：はじめに

「内部監査部門は、組織体のビジネス文化、システム、およびプロセスを深く理解している専門家によって業務が実施され、整備されているインターナル・コントロールがリスクを軽減するのに十分であり、ガバナンス・プロセスが適切であり、組織体のゴールと目標が達成されている、というアシュアランスを提供する。監査委員会と内部監査人は、相互依存関係にあるので意思疎通を図るべきであり、内部監査人は監査委員会に対して、客観的な意見、情報、支援、および知識を提供し、監査委員会は内部監査人に対して、検証と監督を行う。」

(出典：内部監査人協会（IIA）、*The Audit Committee: Purpose・Process・Professionalism*¹)

「IIAの3ラインモデル—3つのディフェンスラインの改訂」²は、組織体の3つの領域における重要な役割と義務を明らかにして

いる。第1ラインと第2ラインは、業務管理、リスク・マネジメント、およびコンプライアンス機能を含んでいる。第3ラインの内部監査（IA）は、「ガバナンスとリスク・マネジメントの妥当性と有効性について、独立にして客観的なアシュアランスと助言を提供する」。組織体の取締役会とその監査委員会（AC）は、IAが提供する組織体内の幅広い領域の調査に関する正確でタイムリーで客観的な情報と所見に依拠している。

ACがガバナンスの役割を果たす際、IAとの関係は非常に重要である。ACは、財務報告、リスク・マネジメント、インターナル・コントロール、コンプライアンス、倫理、経営管理、内部監査人、および外部監査人の監督に責任があるので、幅広い権限を持つことができる（IAとの関係におけるACの役割については、*The Audit Committee: Purpose・Process・Professionalism*¹で詳しく説明されている）。

IAの役割の重要性を考えると、IA部門を定期的に評価することで取締役会とAC

¹ https://global.theiia.org/about/about-internal-auditing/Public%20Documents/Aud_Comm_Brochure_1_.pdf

² <https://na.theiia.org/about-ia/PublicDocuments/Three-Lines-Model-Updated.pdf>. 日本語訳は、『月刊監査研究』2020年8月号掲載。

は、「内部監査の専門職の実施に関する国際基準」³、ベストプラクティス、および取締役会とACの具体的な期待に基づいて、内部監査人が効果的に職務を遂行しているという確信を得ることができる。

この評価ツールは、確立されたベストプラクティスに基づいており、評価の中で取り上げるべき課題への提案を示している。評価ツールは必須のガイダンスとしてではなく、むしろ取締役会やACが以下を調べるために、全体的または部分的に使用できる資源となることを意図している。

- + I Aが行う業務の質と、I Aが自由に使える資源の十分性。
- + I Aチームとの意思疎通のレベル。
- + I Aチームの独立性、客観性、および専門職としての懐疑心。

各節には、取締役会やACなどがI A部門をよりよく理解し、この重要領域のインプットと価値を高めることを目指して独自の計画を策定するために尋ねることができる、基本的分野の一連の質問が含まれている。

第2節：評価プロセス

一部の法域では、I Aの評価の必要性と品質改善プロセスの重要性に対応するために、基準や規制を制定している（付録を参照）。そのようなガイダンスは、I Aの評価と品質に不可欠な要件を示しているものの、それに加えて重要な問題を調査するのはACの責任である。これによりACは、I A部門計画、I A部門目標の達成度、組織体のニーズをどのように効果的に満たしているか、そしてI A部門が提供すべき資源と付加価値サービスを組織体が最大限に活用しているか、を継続的に把握できる。この評価ツールの多くの質問で示されているように、評価以外にも必要

に応じて、内部監査部門長（CAE）とAC委員長の間でオープンかつ頻繁な双方向のコミュニケーションを取るべきである。

I A部門のパフォーマンスをモニタリングすることには、他にも次のような多くの利点がある。

- + I Aの業務の有効性と効率性について理解を深める。
- + I Aの取り組みが、組織体、取締役会、およびACの戦略目標を支援しているという安心感を得る。
- + コントロールやリスク・マネジメントの有効性など、重要な検討事項に関する貴重な最新情報を受け取る。
- + I A部門の効率性や有効性を改善する機会への洞察を見出す。
- + 必要に応じて、外部監査人や他の第三者との業務上の関係を深める方法を理解する。
- + I Aからの遠慮のないフィードバックや、取締役会やACからの建設的なフィードバックなど、率直な対話の機会を増やすことで、監査業務の質を向上することができ、またACとI Aの関係が強化できる。

評価に関して尋ねるべき質問

取締役と監査委員がこの評価ツールの質問を検討する際は、I A部門に対する彼ら自身の監督に関連する、次のような大局的な観点からの質問を考えるべきである。

- + 効果的だが過度の負担にならない年次I A評価プロセスはあるか。
- + I Aがどの程度うまく情報を収集し使用して、事業上の意思決定を支援しているかを評価しているか。
- + この評価は、組織体のリーダーとI A部門のリーダーが、組織体におけるI Aの

³ <https://na.theiia.org/translations/PublicDocuments/IPPF-Standards-2017-Japanese.pdf>

役割と、その役割を変更する必要性や機会を理解するのに役立つ。

包括的で定期的な評価は、自己満足に陥ってすべてが順調であると思込み、IA部門の課題や機会が明らかにできなくなるのを防げる。次節からは、取締役会とACが独自の評価ニーズに合わせて調整できる具体的な質問を示す。

第3節：内部監査部門の業務の質と資源の十分性

「組織体には、効率的かつ効果的な組織体の管理に不可欠な、価値を付加する業務を行う、十分な資源と専門的な能力を備えた内部監査スタッフが最も役立つ。」

(出典：IIA、*Internal Auditing: Adding Value Across the Board*⁴)

IAが行う業務や提供する資源の品質評価は、あらゆる評価の基本的な部分である。本節の評価の全般的な目標は、以下を検討することである。

- + IA部門を評価するACの能力。
- + IA部門が基準や独自の改善プログラムに適合している程度。
- + IAは、部門の基本規程に含まれる責任に沿って行動しているか、また、ACの期待に応えているか。
- + ガバナンス、リスク・マネジメント、およびコントロールに関する事項について、IAが提供する洞察と展望の質。

- + IAによるテクノロジーと技術的専門知識の利用。
- + IAの業務は、組織体にプラスの影響を与えているか。
- + IAのリーダーとチームの能力とパフォーマンス、およびIAが専門職としての責任を遂行する上での有効性。IIAの「内部監査能力フレームワーク」⁵は、これを検討する際の重要な資料となり得る。
- + IAは資源を最大限に活用しているか、また、利用可能な資源やその使用方法に改善が必要かを、IAがベンチマーキングを用いて評価しているか。

以下の質問を使用して、このような重要な課題を取り上げてほしい。本文書の質問は、ほとんどの場合ベストプラクティスを示していることに留意されたい。説明している手順は必須ではないかもしれないが、取締役会とACには、IA部門の監督にそれらを含めることを検討するよう勧める。場合によっては、ACは必要な情報を得るために、経営管理者にこれらの質問をする必要がある。本文書のすべての質問には、各テーマに対する所見の記入欄も用意している。ただし、回答を文書にすることは、それほど重要ではないが、ACが監督の役割を果たす上で回答を調査することがどう役立つかを検討し、さらに深く調査する価値のある領域に焦点を当てることの方が重要である。

質問例	所見
<p>パフォーマンスと期待</p> <ul style="list-style-type: none"> › 前回の評価以降、IAは組織体にプラスの影響を与えたか。IAがACの注意を引いた問題は、関連性があったか。IAの所見と結論に対する適切な支援はあったか。 › IAの成功の定義は、ACの定義と相関関係があるか。 › IAは、組織体のニーズを満たし、事業活動の今後の改善に役立つ価値を付加するよ 	

⁴ https://na.theiia.org/about-ia/PublicDocuments/Internal_Auditing-Adding_Value_Across_the_Board.pdf

⁵ <https://na.theiia.org/standards-guidance/Pages/Internal-Audit-Competency-Framework.aspx>。日本語訳は、『月刊監査研究』2021年1月号掲載。

質問例	所見
<p>うに設計されているか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ I Aは、財務、業務、およびコンプライアンスの（テクノロジー主導の領域を含む）コントロールのモニタリングに成功しているか。 ▶ I Aの資源は、I A基本規程を履行し、取締役会とACの期待に応えるのに十分か。 ▶ 監査チームには、監査戦略があるか。戦略的ビジョンには、効果的な業務を行うために必要な資源（つまり、適切な資源と人材管理）に対応するための、監査チームの要員計画が含まれているか。 ▶ I A基本規程は、ACによって定期的に見直されているか。I Aはその基本規程に従っているか。 ▶ 監査計画は、問題をタイムリーに検出し、期待どおりに監査を完了できるように策定されているか。 ▶ 報告書の発行は必須ではないが、ベストプラクティスとして、I Aは発見事項と期限付きの是正措置計画の詳細を示した結果を伝達しているか（I Aの報告に関するその他の質問は、第5節に含まれている）。 ▶ 経営管理者は、I Aの要請に対応しているか。 	
<p>リスクの考慮</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ I A部門は、組織体に対する現在のリスクや新たなリスクについて、取締役会やACの知識を広げているか。 ▶ 監査計画と組織体の戦略目標やリスクとの間に、明確な関連性はあるか。 ▶ CAEは、組織体の目標を妨げる、またはその可能性のある、既存または新たなリスク領域を含む困難で重要な領域を、監査計画でどのように取り上げるかをACに説明しているか。 	
<p>テクノロジーと技術的専門知識</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 監査チームは、高度なデータ分析、ロボットプロセス自動化、プロセスマイニング、機械学習、人工知能などの革新的なテクノロジーを使用して、リスクの傾向や異常を特定しているか。 ▶ I Aは、アシュアランス業務とコンサルティング業務を支援し、部門の効率を高めるために、様々なテクノロジーを継続的かつ効果的に評価して導入しているか。 ▶ I Aは、テクノロジーの使用を拡大して、（単に問題を特定するだけでなく）問題の影響と根本原因も検討しているか。 ▶ テクノロジーや技術分野で、I Aチームは必要に応じて外部の専門家を雇っているか。 	
<p>品質のアシュアランス</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ I Aチームは、品質プロセスを利用して継続的な改善努力をしているか。 ▶ 最新の品質のアシュアランスと改善のプログラムの内部報告と外部評価の結果は、どのようなものか。 ▶ 重大な改善分野、またはIIAや他の品質基準への不適合があった場合、その理由は何で、I Aはそれぞれに適切に対処したか。 ▶ I Aは、「内部監査の専門職の実施に関する国際基準」に適合しているか。 ▶ I A部門は、法規制によってIIAの「基準」の特定の部分への適合が禁止されているかどうかを、必要に応じて適切に開示したか。 	

質問例	所見
<p>価値の付加</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ I A部門は、新たな法規制の遵守、新型コロナウイルス感染症の流行のような予期しない出来事、または組織体のイネープリング・テクノロジーの導入など、主な導入施策に専門知識を提供しているか。 ▶ I Aチームは、アシュアランスの提供という責任に加えて、コンサルティングの役割も果たしているか。 ▶ I Aは、コンサルティング業務を実施した結果として、アシュアランス業務の対象となる分野を見出したか。 ▶ I Aは、監査業務終了後に監査対象部署へのアンケート調査を行っているか。 ▶ I Aは、経営管理者からの要請を受けているか。 ▶ I Aは、重要な定期異動（ローテーション）の対象と考えられているか。 	
<p>チームの資格と構成</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ A Cは、I Aには業務を適切に実施してA Cの目標を達成するための、適切な資源と能力があるかを知っているか。 ▶ C A Eは、チームの公認内部監査人（C I A）の割合をA Cに報告しているか。修士号を持つ割合や、他の関連する専門的な経験や資格を持つ割合は、A Cに報告しているか。 ▶ I Aチームは、人口統計学や経験の種類と範囲の観点から、多様性のあるグループか。 ▶ A Cは、I Aが効果的な採用、定着、および昇進を通じて、チームを継続的に強化しているかを知らされているか。チームメンバーの知識と視野を広げるために、I A部門内でローテーションを行っているか。 ▶ C A Eとチームの主要メンバーの後継者計画はあるか。 ▶ I Aは、特定のプロジェクトでゲスト監査人プログラムを採用したか。 	
<p>ベンチマーキングとフィードバック</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ I Aはベンチマーキングを使用して、I Aのプロセス、パフォーマンス、およびリーダーシップを他の組織体と比較して確認しているか。 ▶ I Aによって追跡されているベンチマークやパフォーマンス指標は、合理的でありI A基本規程の義務と責任に従っているか。 ▶ 経営管理者は、C A EとI Aチーム全体にフィードバックをしているか。 ▶ 外部監査人は、I A部門に関するフィードバックをしているか。 	
<p>統合的アシュアランス</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ I Aは、他の内部や外部のアシュアランス業務の提供者との活動を確実に調整するために、統合的アシュアランスにどのように取り組んでいるか。 ▶ 統合的アシュアランスのアプローチは、対象範囲のギャップや作業の重複を明らかにしたか。 	

「内部監査人は、業務の非効率性、無駄な支出、従業員の盗難、詐欺、法規制の違反などを特定することで、組織体にかんがりの金額の節約をもたらし、市場での評判を守ることができる。彼らは組織体の風土を注視し、ま

た、リスクの評価、機会の分析、改善の提案、倫理観の促進、記録と財務諸表の正確性の確保、重要な問題に関する経営管理者と取締役会の啓発、不正の調査、無駄な支出の検出、不正の兆候の検出、より強力なコントロール

の推奨、規制等の遵守状況のモニタリングなどの、様々な活動を行う。」

（出典：IIA、*All in a Day's Work: A Look at the Varied Responsibilities of Internal Auditors*⁶）

第4節：内部監査チームとの意思疎通

ACとIA部門の定期的なコミュニケーションにより、ACはIAのパフォーマンスとプロセスを適切に監督できる。本節の質問は、IAとACの間の活発で建設的な対話を促進するのに役立つ。

質問例	所見
<p>業務上の関係</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ IAは、IA計画を伝えてフィードバックと承認を求めているか。IAは、IA計画が現在でも適切であることを確認するためのフォローアップをしているか。 ▶ 取締役会、AC、IAの間のすべての議論は、率直で徹底的か。 ▶ CAEは、会議以外でもAC委員長と意思疎通ができるか。 ▶ IAは、気兼ねすることなく、重要な問題や時には難しい問題を提起しているか。 ▶ IAが難しい問題を提起するときに、摩擦はあるか。 ▶ CAEは、ACへ定期的な報告をする際に、適切かつ十分な時間を与えられているか。 ▶ ACは、経営管理者を同席させずにCAEとの非公開の会合を持っているか。「はい」の場合、頻度はどの程度か。「いいえ」の場合、なぜそうしないのか。 	
<p>コミュニケーションの質</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ CAEはACに、定期的なリスク評価と監査計画について伝えているか。 ▶ ACに対するIA部門のコミュニケーションは、対象にしているリスク、新たなリスクをモニタリングするためのプロセス、および不正の可能性を十分に把握しているか。 ▶ ACに対するIA部門のコミュニケーションは、IAチームのプロセスが専門家らしい方法で実施されているか、およびその結果が正確であるか、を判断するために必要な情報をACに提供しているか。 ▶ IA部門は、経営管理者の改善計画が実施された割合と実施時期を報告しているか。 ▶ IAのコミュニケーションは、きちんと整理されていて明瞭か。ACはこれらを見ても高品質でインパクトのある報告であると考えているか。 ▶ IAの報告は、タイムリーであり、事実上正しく客観的で建設的か。 ▶ IAの報告は、IA部門、重大なリスク・エクスポージャー、およびコントロール上の問題を対象にしているか。監査業務の目的と範囲、結論、提案事項、および改善計画は明確か。 	

第5節：監査人の独立性、客観性、および専門職としての懐疑心

「外部監査人は、組織体から独立している。

それに対し、組織体に不可欠な内部監査人は、業務の取り組み方において組織上の独立性と客観性を示し、監査対象業務から独立している。内部監査人の監査委員会への報告関係は、内部監査部門の独立性にとって重要である。」

⁶ <https://global.theiia.org/about/about-internal-auditing/Public%20Documents/All-in-a-Days-Work-Brochure.pdf>

(出典：IIA、*The Audit Committee: Purpose・Process・Professionalism*¹⁾)

IIAの「内部監査の専門職的实施の国際基準」は、内部監査人の独立性と客観性の要件を明記している。さらにIIAは、ベストプラクティスでは、二系統の報告経路を通じてIAの独立性を確立するようIA基本規程で定めることを求めている、と言及している。この関係の下で、CAEは最高経営者に部門

運営上の報告をすべきであり、また、ACには戦略的方向性とアカウンタビリティについて報告すべきである。

そのためIA部門は、独立性のある監査人としての役割と、組織体の重要な資源としての役割との間の、微妙なバランスを保っている。本節の質問は、そのバランスを保ってモニターするために必要な手順を明らかにするのに役立つ。

質問例	所見
<p>全般的なベストプラクティス</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ CAEは、客観性と懐疑心を積極的に奨励する文化を促進しているか。 ▶ 全般的な文化とACによるガバナンスは、IAの客観性と懐疑心を支えているか。 ▶ IAスタッフは、独立性、客観性、および懐疑心の重要性について十分な研修を受けているか。必要に応じて再教育を受けているか。 ▶ IAは、客観性や懐疑心に関する課題をACに報告しているか。 ▶ IAチームのメンバーは、新たな役割や任務で洞察や創意工夫ができるように、定期的にローテーションされているか。スタッフの継続的能力開発計画はあるか。 ▶ IAチームの組織体制の論理的根拠は何か。また、CAEのIA部門戦略ビジョンの中で、体制の再編成を検討する必要があるか。 ▶ IAチームは、基準やベストプラクティスに沿った独自の方針と手続（手段）を維持しているか。これらのIA方針と手続は、(新人監査人やゲスト監査人の)研修目的に使用され、IAチームが参照できるようになっているか。 	
<p>独立性</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ IA部門の独立性は、受け入れられ、尊重されているか。IA部門は信頼でき、信頼が厚いと考えられているか。 ▶ CAEは、ガバナンスに関わる人々と率直に話すことができるか。 ▶ IAチームとCAEは、IAの独立性、客観性、および懐疑心を妨げることなく、経営管理者、取締役会、およびACとの協力関係を構築できるか。 ▶ IAチームは、組織体の一層の成功に役立つ発見事項を策定するために独立性を維持することが全般的なゴールであると理解しているか。 ▶ IA部門は、監査を最小限に抑えるか制限する、または経営管理者から頼まれて便宜を図る、というプレッシャーに抵抗できるか。 ▶ 監査発見事項は、弱められたり差し止められたりしているか。それとも経営管理者は、IAからの報告を信頼して歓迎しているか。 ▶ IA部門が自己満足に陥り、同じ手続を繰り返すようになった兆候はあるか。 ▶ 監査チームの代表者は、例えば四半期ごとのように定期的に組織体のリーダーと会っているか。 ▶ CAEの報告は、経営管理者が同席しない非公開の会合で聞かれているか。CAEは、直面している課題や厳しい決断について率直に話し合っているか。 	

質問例	所見
<p>客観性</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 内部監査人の個人的なまたは専門職としての関与、あるいは監査対象領域への忠実義務が、彼らの客観性を曇らせた例はあるか。 ▶ I Aチームのメンバーは、すべての監査業務において公正不偏な態度を保てたか。 ▶ C A EやI Aチームの他のメンバーがインセンティブ・ベースの報酬を受け取っている場合、それが彼らの客観性に影響を与えているように思えるか。 ▶ I Aは、アシュアランス業務とコンサルティング業務のバランスが取れているか。 ▶ C A Eは、進んで過ちや欠点を認め、新たなスキルや視点を学びたいと思っているか。 ▶ I Aは、必要に応じて外部の専門家の援助を求めているか。 	
<p>懐疑心</p> <p>選択した他の分野の場合と同様に、取締役会とA Cは、I Aの経営管理者に本節の質問をしてもよい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ I Aチームは、業務において適切な懐疑心を働かせているか。I Aチームは結論を出す前に、適切な文書を収集して事実かどうかを疑っているか。 ▶ チームメンバーは、健全なレベルの好奇心と探求心を持っているか。 ▶ チームメンバーは、組織体内の他者から受け取った情報を疑ったり独自に検証したりすることに抵抗がないか。彼らはそうするように、積極的に奨励されているか。 ▶ チームメンバーは、単純な「はい」「いいえ」で答えられる質問をしているか。あるいは、よく練られていて、より詳細に、または、より大局的に答えなければならない質問をしているか。 ▶ I Aチームは、自社、自社の業界、および自社が直面するリスクと課題について十分な知識を持っており、疑わしいデータや所見を識別しているか。 ▶ 疑わしい発見事項に直面した場合、I Aチームのメンバーは、他の組織体がそのような問題をどのように処理または経験しているかを調べることがあるか。 ▶ I Aチームのメンバーは、自分の発見事項にエラーや予期せぬ内容がないかを精査できるか。彼らは、監査手続から一步離れて組織体の全体像を見ることができると感じるか。 ▶ I Aチームは、期限を守ることや発見事項の承認を受けることに対するプレッシャーを感じることなく、懐疑心、客観性、および独立性の行使に必要な時間を与えられているか。 ▶ I A報告書の評定は懐疑心について何を示しているか。問題がない、またはコントロールが良好であるという評定は、懐疑心や探求心の欠如を示しているのか。 	

第6節：結論—価値の付加

I AとA Cが協力すると組織体の全体像が把握できるため、大小を問わず様々なガバナンス、リスク、およびコントロール上の検討課題が特定できる。評価というのは強力なツールなので、A Cは、3ラインすべてが組織体のリスク環境の全体像に貢献し、そこから恩恵を受けることを確実にするために使うこ

とができる。

取締役会とA Cは、この評価ツールを使用して、以下のための最善の方法が判断できる。

- + I Aのアウトプットが、どの程度期待を満たしているかを理解する。
- + 取締役会とA Cが、C A Eと経営管理者からI Aの役割と取り組みについて聞いていることを検証し、この領域の理解を深める。

+ 本評価と I A 部門の自己評価や利用可能なベンチマーク・データとの相関関係を示し、監査委員がこの時点で I A 部門に依拠できることを A C に保証する。

評価が一旦終了しても、質問は終了しないことに留意してほしい。その後、取締役と監査委員は、評価結果が期待どおりであったか、また、改善の機会があるか、を自問すべきである。評価することで、ベンチマークが策定される場合があり、さらなる検討への道が開かれる可能性がある。評価はまた、取締役会や A C が、組織体が I A 部門からその価値を最大限に引き出しているか、または I A チームがより貢献できるようなコンサルティングのプロジェクトや役割があるか、を検討するのも役立つ。評価が一旦完了すると、取締役会と A C は結論を用いて必要な変更を行い、潜在的な新しい機会を活かして組織体を次の段階に進めるために、I A をさらに深く関与させることができる。

付録：関連する基準と米国の要件

IIA の「基準」

IIA の『専門職の実施の国際フレームワーク』の「基準」1300 番台に従って、組織体の C A E は、品質のアシュアランスと改善のプログラム（Q A I P）を作成し維持しなければならない。Q A I P には、IIA の「内部監査の定義」と「内部監査の専門職の実施の国際基準」への適合評価と、I A 部門の監査人が「倫理綱要」を適用しているかの評価を含めるべきである。Q A I P は、内部評価と外部評価の両方で、I A 部門のすべての側面を網羅すべきである。Q A I P は、I A 部門の効率性と有効性を評価して、改善の機会を明らかにすべきである。

外部評価は、組織体外の適格にして独立した評価実施者または評価チームによって、最低でも 5 年に 1 度は実施されなければならない

い（IIA 基準1312）。内部評価には、I A 部門の継続的モニタリングと、定期的自己評価または I A の実務について十分な知識を有する組織体内の内部監査部門以外の者による定期的評価を含めなければならない。IIA の「内部監査の品質評価マニュアル」では、少なくとも年に 1 度の内部評価を推奨している。

個々の基準

IIA 基準1300—品質のアシュアランスと改善のプログラム。内部監査部門長は、内部監査部門を取り巻くすべての要素を網羅する、品質のアシュアランスと改善のプログラムを作成し維持しなければならない。プログラムには、継続的モニタリングと定期的自己評価の両方を含む内部評価プログラムと、外部評価プログラムの両方を含めるべきである。IIA が指摘しているように、I A 部門には、専門職の基準に従う義務だけでなく、監査対象部署（またはコンサルティング業務における依頼者）に対して最高水準の品質を維持する義務もある。

IIA 基準1311—内部評価。「定期的自己評価は、「基準」および内部監査部門について、通常、もっと全体的、包括的にレビューするという点で、継続的モニタリングとは焦点が異なる。対照的に、継続的モニタリングは、通常、個々の業務レベルで行われるレビューに焦点を置く。加えて、定期的自己評価は、すべての基準に対する適合を取り扱う。一方、継続的なモニタリングは、個々の業務レベルでの実施基準に対する適合に焦点を当てて頻繁に実施する。」

IIA 基準1312—外部評価。I A 部門の外部評価は、組織体外の適格にしてかつ独立した評価実施者または評価チームによって、最低でも 5 年に 1 度は実施されなければならない。外部評価の目的は、I A 部門が「基準」と「倫理綱要」にどの程度適合しているかを

評価することである。

証券取引所の要件

ニューヨーク証券取引所上場企業マニュアル：全上場企業は、上場から1年以内に、内部監査機能（セクション303A.07(c)）を有する義務がある。解説によると、「上場企業は、経営管理者と監査委員会に上場企業のリスク・マネジメント・プロセスとインターナル・コントロール・システムの継続的な評価を提供するために、内部監査機能を維持しなければならない」。このマニュアルは、「監督機能を最も効果的にするために、監査委員会は、経営管理者、独立監査人、および内部監査機能の責任者との個別の会合を持つことによるメリットを享受しなければならない」と述べている。

ナスダック：ナスダックは、上場企業に内部監査機能を有することを義務付けていない。

参考資料

内部監査人協会

» 「基準」1300番台を含む、「内部監査の

専門職的実施の国際基準」

- » 内部監査能力フレームワーク
- » IIAの3ラインモデル—3つのディフェンスラインの改訂
- » Internal Auditing: Adding Value Across the Board
- » 内部監査アンビション・モデル^a
- » 内部監査部門の基本規程のモデル^b

その他

- » Center for Audit Quality External Audit Assessment Tool^c

免責事項

IIAは、情報提供と教育を目的として本稿を発行する。本稿は、個別具体的な状況に対する確答を提供することを目的とするものではなく、あくまでも指針としてご使用いただくものである。IIAは、特定の状況に直接関係する独立した専門家の助言を求めることを推奨する。IIAは、本稿のみに依拠する者に対して一切の責任を負わない。

^a 訳注：『月刊監査研究』2021年1月号掲載。

^b 訳注：『月刊監査研究』2017年8月号掲載。

^c 訳注：https://www.thecaq.org/wp-content/uploads/2019/03/auditor_assessment_tool_worldwide.pdf